

2020年における世界の食料需給見通しのポイント

- 1 世界的な金融危機による世界経済の低迷後、先進国を中心に経済の成長に脆弱性が見られる一方、新興国・途上国が今後とも高い水準で経済成長し、世界経済を牽引すると見込まれている。
- 2 これを前提とすると、世界の食料需給は、中長期的には人口の増加、所得水準の向上等に伴うアジアなど新興国・途上国を中心とした食用・飼料用需要の拡大に加え、バイオ燃料原料用の農産物の需要の継続的な増加も要因となり、今後とも穀物等の需要が供給をやや上回る状態が継続する見通しであり、食料価格は2007年以前に比べ高い水準で、かつ、上昇傾向で推移する見通しである。

世界食料需給モデルの概要と前年度からの改良点

- 1 「世界食料需給モデル」は、将来にわたる人口増加率や経済成長率について一定の前提を置き、価格を媒介として各品目の需要と供給を世界全体で毎年一致させる「同時方程式体系需給均衡モデル」であり、約6千本の方程式体系から構成されている。
- 2 本年度においては、同モデルについて、昨年度採用した各種パラメータ等について精度を向上させるとともに、食料需給に影響を与える基礎的な要因に加え、バイオ燃料原料用の農産物の需給が世界の食料需給を見通す上で無視することができない要因となっていることを踏まえ、とうもろこしを原料とするバイオエタノールに加え、新たに大豆油を原料とするバイオディーゼルの需給に係る方程式をモデル内に組み込み内生変数化させる改良を行った。

世界の食料需給見通し（予測結果）のポイント

- 1 穀物の消費量は、2020年までの12年間で5億トン増加し27億トンに達する。
小麦及び米は、主に食用需要の伸び、とうもろこしの消費量は、主に飼料用とバイオ燃料原料用の需要の伸びにより増加。
- 2 各品目とも消費の伸びに生産が追いつかず、期末在庫量（率）は低下。
- 3 穀物価格は2008年に比べ名目で24～35%、実質で3～14%上昇。
- 4 穀物及び大豆の貿易の偏在化の傾向は引き続き拡大。
① アジア、アフリカ、中東では消費の伸びに生産が追いつかず、純輸入量が

拡大。

② 北米、中南米、欧州、オセアニアが純輸出量を拡大させ、純輸入量の拡大に対応。

③ 新興国 BRICs など国別にみると、欧州では、ロシアが純輸出量を拡大する一方でEUは純輸入量が拡大、アジアでは、中国が引き続き純輸入量を拡大する一方でインドは輸出国の地位を維持。

5 米国、ブラジル、アルゼンチン、EU等のバイオ燃料政策主導による、とうもろこし、大豆、大豆油の需要増等を要因として、植物油、とうもろこし、大豆の実質価格は、米、小麦、その他穀物より高い割合で上昇する見通し。

6 肉類の消費量は、年間1人当たり消費量の伸びから増加。価格も名目で32～46%、実質で7～14%上昇する見通し。